

## ぼくのおじいちゃん

静岡県

静岡市立清水浜田小学校六年

遠山 智史

ぼくのじーじは今八十二才。雨の日も、風の日も、暑い日も寒い日も、いつも二人で歩いている。周りの人に笑われてしまいそうなくらい頼りない歩き方だけど、ぼくはそんなじーじを心から尊敬している。

じーじは、昔借金だらけで、駅前で自転車預りをはじめ、その後おばあちゃんと結婚して二人力を合わせて、駅前にビジネスホテルを建て、長い間社長としてがんばって来た。現在は会長として、毎日ホテルに通っている。

以前、心臓発作で救急車で運ばれ、生死をさまよったじーじ。二度目の入院はぼくが生まれた年だった。双子のぼく達をじーじが、だっこしてくれることが多くぼくはじーじの大きな手の中で安心してすぐにねむったそうさ。そんなつかれがでたのだろう。じーじは朝方苦しみ始め二度目の救急車で運ばれた。顔は真つ青、体も冷たくなり、皆も泣いていたそうさ。じーじはきせき的にたすかされた。ドクターもじーじは気力で生き返ったとおっしゃっていたそうさ。

それ以来、健康のため、毎日かかさず歩いているじーじ。人にはかっこ悪くみえるかもしれないが、ぼくはじーじのその精神力がとてすばらしいと思う。

小さな努力を積み重ね、コツコツ続けて行くじーじ。ぼくが漢字の宿題の途中でため息をついていたら、「一字書いたら、一字終わりに近付くよ。」

と励ましてくれた。ぼくは漢字の宿題を、する度にこの言葉を思い出す。

じーじが三度目の救急車で運ばれたのは、ぼくの姉の誕生日を皆でお祝いした日の帰り道。じーじは大腸ガンだった。

「今度こそ、じーじとお別れかも。」

ぼく達は皆で夜中祈った。ぼくはじーじは負けないと信じていた。手術は成功。嬉しくて涙が止まらなかつた。

病室にお見まいに行つた時、大きな傷を見せてくれた。痛みをこらえ、笑顔で

「智ちゃん達がお守りに書いてくれたじーじの絵のおかげで元氣になったよ。ありがとうね。」

と言ってくれたじーじ。ありがとう。じーじは自分の生き方を通して、ぼく達に苦しみを乗りこえ、あきらめず前向きに強く生きていくことの素晴らしさを教えてくれた。人目を気にせず、コツコツと努力を続けていくことの大切さを示してくれた。どんな役職であつてもけんきよに、誰にでも飾らず接することの大切さを教えてくれた。ぼくもそんな人になれるようがんばるよ。

優しいじーじ。いつも本当にありがとう。体が大変でもぼく達が頼むと、車でもこへでも連れて行ってくれて。ぼくが免許を取つたら、一緒にドライブに行こうね。それまで絶対に元氣でいてね。約束だよ。